

## I 研究主題及び副主題

# 「児童生徒が創り上げる授業の創造」 ～児童生徒が学び方を身に付け、自ら課題を解決する授業スタイルの構築～

## II 主題設定の理由

日南市は「夢と創造と感動の日南教育」をスローガンとして、豊かな心と命を育み、豊かな学力を身に付けた児童生徒の育成に取り組んでいる。また、その具現化のための方策として、小中連携・小中一貫教育による、一貫性・連続性のある教育システムを構築し、9年間を見通した指導を行おうと市内全ての小中学校が協力し合っている。

そのような中、前年度行った研究では、日南市における授業モデルの構築と実践を目指し、「当たり前前のことを当たり前にする」と市内全教職員で確認し、実践していくための指針として「日南モデル」をまとめるに至った。

日南モデルには授業の展開の在り方、発問、板書の在り方等、授業のあらゆる場面に対応した基本的な情報が盛り込まれており、本年度は市内の多くの学校がこれを基にして授業の在り方について再確認し、授業実践に生かしているところである。

しかしながら、抽象的な部分が若干見られるため、先生方から「もう少し具体的に示して欲しい。」という声が少なからず寄せられた。

そこで、本年度は、日南市が求めている授業の姿をより具体的に市内の全教職員に示すことを目標とし、さらには、最も理想的な形である「児童が創り上げる」という授業を具体化したものを授業例として提供できないかと考えた。

このようなことから、本年度は、「児童生徒が創り上げる授業の創造」を研究主題とし、「児童生徒が学び方を身に付け、自ら課題を解決する授業スタイル」を市内の全教職員が実践できるようにするために、授業の在り方を授業者側、児童生徒側の両方の立場から追究し、その在り方や指導手順、学習手順をより具体的な形で提供することを目指した。

## III 研究目標

- 児童生徒に学び方を身に付けさせ、自ら課題を解決させるような授業の展開及び指導法を、市内の全ての教職員が誰でも取り組める形で示すと共に、具体的な授業の姿でも示し、本市教職員の授業改善を図る。

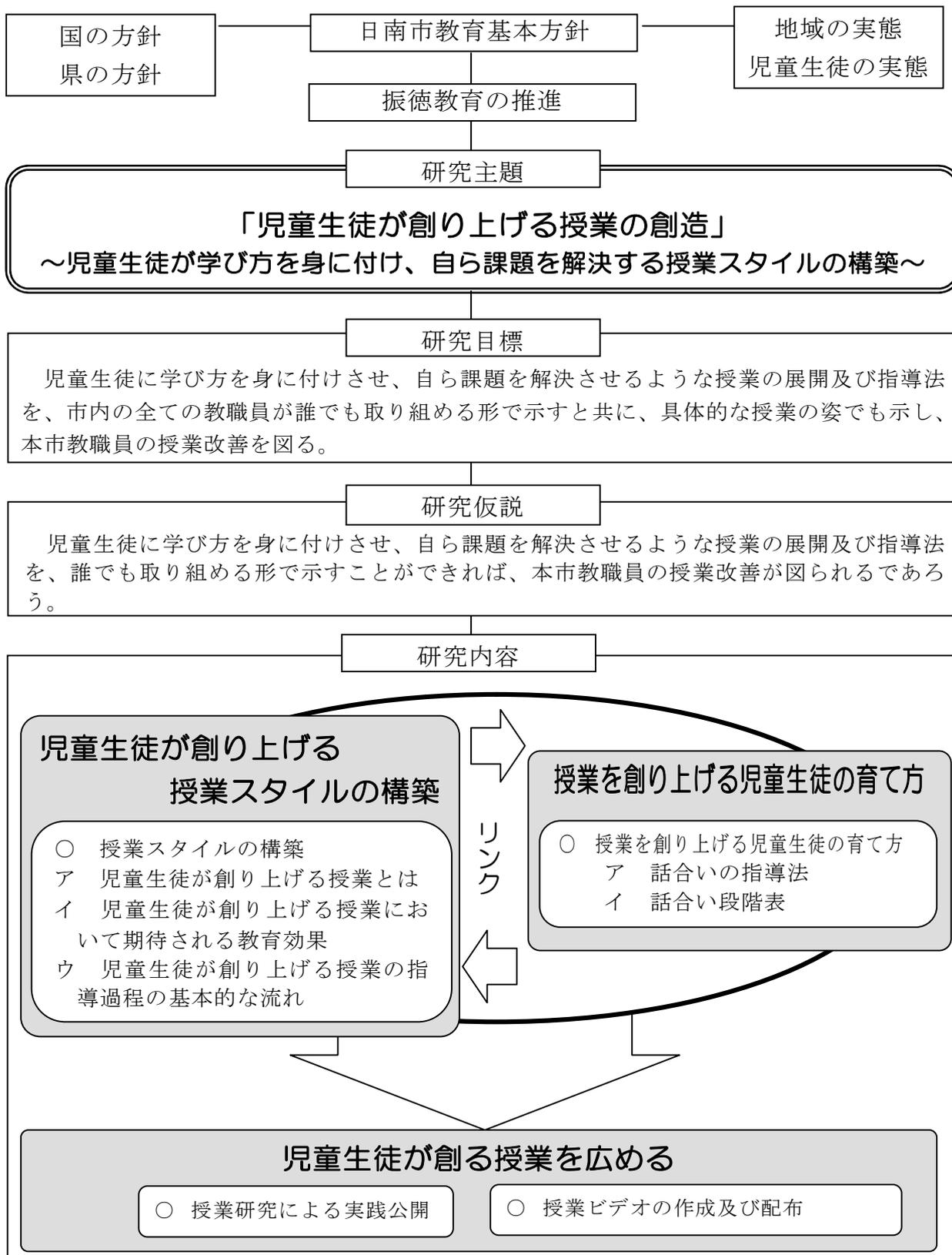
## IV 研究の仮説

児童生徒に学び方を身に付けさせ、自ら課題を解決させるような授業の展開及び指導法を、誰でも取り組める形で示すことができれば、本市教職員の授業改善が図られるであろう。

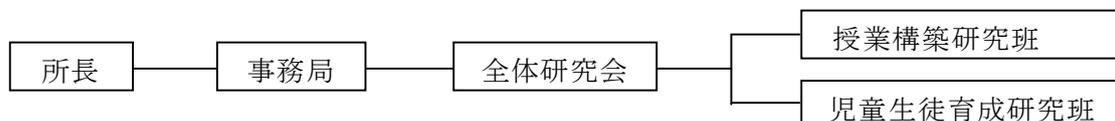
## V 研究内容

- 1 児童生徒が創り上げる授業スタイルの構築
  - (1) 児童生徒が創り上げる授業の基本的な考え方
    - ア 児童生徒が創り上げる授業とは
    - イ 児童生徒が創り上げる授業において期待される教育効果
    - ウ 児童生徒が創り上げる授業の指導過程の基本的な流れ
  - (2) 授業を創り上げる児童生徒の育て方
    - ア 話合いの指導法
    - イ 話合い段階表
  - (3) 授業の実際
- 2 授業ビデオの作成

## VI 研究の全体構想



## VII 研究組織



## Ⅷ 研究の実際

### 1 児童生徒が創り上げる授業スタイルの構築

#### (1) 児童生徒が創り上げる授業の基本的な考え方

##### ア 児童生徒が創り上げる授業とは

本研究所が提案する、「児童生徒が創り上げる授業」とはどのようなものか。これを説明するため、そうでない授業との違いを挙げることで具体的に示すこととする。

##### これまでよく見られた授業

- 教師の誘導的な問いかけによって、思考すべき内容が限定されており、児童生徒の思考力、判断力、表現力または活用力が発揮されにくい授業。
- 児童生徒全員が参加しておらず、一部の児童生徒だけが思考、発表、理解する傾向にある授業。
- 児童生徒同士が個々のもっている知識や理解を交換する場が少なく、情報交換の方法や他者の知識や理解の活用方法を学ぶ場が少ない授業。

##### 児童生徒が主体となり創り上げる授業

- 解決しなければならない大きな一つの課題が与えられ、児童生徒が自分のもつ知識や理解力を発揮しながら解決に取り組む授業。
- 児童生徒全員が参加し、お互いに意見や考えをやり取りしながら本時の学習内容を理解、習得する授業。
- 課題解決の過程で、児童生徒同士が課題解決の方法や、知識や理解の表現や活用の方法、他者との意見交換の方法等を交換し合うことで、他者から多様な考え方や視点等を学ぶことのできる授業。

つまり、以下のような授業が「児童生徒が創り上げる授業」と言える。

- 授業で与えられた大きな一つの問題に対し、全ての児童生徒が自分のもっている知識や理解力を発揮しながら主体的に解決に取り組むと共に、お互いの知識や理解を交換し合ったり、考えを評価し合ったりしながら、自分たちの力で解決を成し遂げていく授業。
- 本時の指導目標が達成され、児童生徒に指導事項を理解させられるだけでなく、理解の過程で問題解決の方法や自分の知識や理解の表現や活用の方法、他者との意見交換の方法、多様な考え方や視点等を学ばせることのできる授業。

##### イ 児童生徒が創り上げる授業において期待される効果

児童生徒が創り上げる授業を始めると、まず教師の授業に対する意識が変わり、発問、指示、展開などが変わってくる。すると、児童生徒に特徴的な変化が現れ始める。さらに実践を続けると学級全体が大きく変化する。これは、本研究所の研究員が実際に実践した結果、多くの学級で確認、実証されたことである。以下に具体的に説明する。

##### (ア) 授業の変化

###### a 指導事項の明確化

児童生徒が創り上げる授業では、学習問題を与えることによって、本時学習の指導事項を児童生徒自らが明らかにし、習得していくことを目指す。

したがって、教材研究の段階で「何を教えるか」「そのためにどのような学習問題を与えるか」「学習問題を解決する過程でどのような知識や技能を習得させるべきか」「授業の最後に何をおさえて終わるか」など、授業の目標と学習問題、発問、指示、支援、助言等の設定が全て連動した授業を計画するようになる。

#### **b 教師の発言の減少と児童生徒の発言の増加**

このスタイルの授業が児童生徒に定着してくると、児童生徒は出された学習問題に対する学級全員での解決方法を身に付け、適切に活用できるようになる。すると、教師が説明的な発言をする必要がなくなっていく。そして、逆に、児童生徒が自分たちで解決の方向性を決定して話し合いを進行したり、問題を解決するために全員の意見を引き出したり、話し合いを行ったりするようになり、児童生徒の発言数が増加していく。

### **(イ) 児童生徒の変化**

#### **a 授業に対する主体性の向上**

本授業スタイルでは、児童生徒が自らの考えをもちながら学習に参加できるような学習問題を与えることから授業がスタートする。また、問題解決の過程で、児童生徒自らが主体となって、解決のための活動や話し合いを展開し、学級の全員を巻き込みながら解決へ進んでいくように教師が仕組んでいく。そのため、全員が問題に対して自分の考えをもちながら主体的に解決に臨むようになってくる。

#### **b 相手意識の向上**

本授業スタイルにおける問題解決場面では、児童生徒同士が互いの知識や理解を交換し、力を合わせて問題を解決しなければならない状況を教師が仕組んでいく。このことで、発言する者は聞いてくれる相手を、聞き手は話している相手を自ずと意識するようになる。

#### **c 問題解決の方法の理解と技能としての定着**

本授業スタイルを継続的に行うと、児童生徒は学級全員の知識や理解を発揮して学習問題を解決する手順や方法を理解し、技能として使えるようになっていく。問題解決の手順や方法を身に付けた児童生徒は、国語科の学習に留まらず、他教科の授業における問題解決場面でもその力を発揮できるようになる。

### **(ウ) 学級全体の変化**

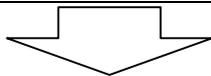
児童生徒が学級全員による問題解決の方法を理解し、身に付けていくと、学級の問題を自分達で主体的に話し合いを開き、解決するようになる。また、学級内のよりよい人間関係が醸成され、協力したり助け合ったりして課題解決を図るなどの姿が日常化してくる。

## ウ 児童生徒が創り上げる授業の指導過程の流れ

児童生徒が創り上げる授業においては、次のような学習過程をとることを提案する。

### 学習問題の提示

- 問題解決の過程で、本時の指導目標が達成され、本時の指導事項が学力として定着するような学習問題を提示する。
- 問題解決の過程で、既習事項が生かされ、活用方法の理解や定着を図ることができるような学習問題を提示する。



### 児童生徒による問題解決

#### ① 個による解決

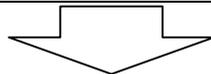
- 個々の児童生徒による、知識理解を発揮した自力解決  
学習問題に対し、全ての児童生徒に自分なりの考えをもたせる。この際、個々の児童生徒の中に、他の児童生徒にとって有効な視点や考え方が生じる。また、同時に本時の指導事項の理解、習得に対する課題も生じる。

#### ② 集団による解決（問題解決のための話し合い）

- 意見交換による個々の課題の補完（補い合うこと）  
意見交換により、それぞれの知識や理解が交換され、個々の課題が互いに補完される。
- 意見交換による解決の視点や考え方の交換  
意見交換により、それぞれが個々にもっていた問題解決の視点や考え方が交換される。
- 言語能力及び活用力の向上  
意見交換をするために、自分の考えや相手の考えに対する賛否を述べ合う。その際、言葉や資料を活用する力が向上する。

#### ③ 問題解決時における教師による指導

- 集団での問題解決の方法の指導  
意見の出し方、意見交換の仕方等、問題を解決する方法を段階的に指導する。ただし、指導するのは方法だけで、内容に触れるような助言はしない。
- 新しい知識の教授  
問題解決の過程で本時学習で学ばせるべき学習事項を指導する。
- 誤りや問題の訂正、補完  
問題解決の過程で生じた児童生徒の知識や理解における誤りや問題を訂正したり指導したりする。
- 児童生徒への称賛による定着・拡散  
問題解決のための有効な考え方や視点、言葉や知識の活用の仕方等、児童生徒のもつ有効な知識や技能については称賛し定着を図ると共に、他の児童生徒への波及を図る。



### 授業のまとめによる指導事項の確認、定着

- 教師によるまとめ  
学習事項を確認し、知識として一般化する。
- 児童生徒による学習事項の文章化  
児童生徒に本時学習で学んだことを自分の言葉で文章化させることで、指導事項の確認と定着を図る。また、教師はその内容から児童生徒の学習状況を把握する。
- 練習問題による定着  
本時学習で学んだことを練習問題に取り組みせることで活用できる知識にまで高める。

(2) 授業を創り上げる児童生徒の育て方

児童生徒が創り上げる授業を展開するためには、児童生徒が主体的に話し合いを進め、問題を解決する力を身に付けていなければならない。しかし、それらの力は本授業スタイルを継続して行うことで身に付くものでもある。そこで、授業の中で児童生徒に問題解決の手順や話し合いの進め方を教師がどのように指導すればよいかを明らかにした。

ア 話し合いの指導法

児童生徒が創り上げる授業を構築するためには、要となる「話し合い」の充実が求められている。昨年度の本研究所のアンケートの中にも、「話し合いの指導の仕方がわからない。」や「話し合いのマニュアルがあるとよい。」などの意見が多数あった。

そこで、話し合いの指導をする際に活用できるマニュアルを作成した(資料1)。指導者が、児童生徒が話し合いの中で使用する言葉を系統的に理解し、後述する「子どもがみるみる話すようになる指導段階表」(資料2)とあわせて使用することで、効果的な指導ができると考えた。特に、全員が話し合いに参加し思考を深めことができるようにするために、「進行」や「質問・応答」などの話型だけでなく、「話し合いが苦手な子」に対しての話型も載せることにした。そうすることで、全員で話し合いを深め、児童生徒が創り上げる授業につながるようにした。

「作成の意図」を掲載することで、配付された際に、指導者に、本資料の目的を理解してもらい、活用してもらいやすくした。

「現在使用しているマニュアル等の見直しに役立ててください。」「短冊等での学級掲示も効果的です。」など「活用の仕方」を掲載することで、より効果的な活用につながるようにした。

発達段階に応じた「話し合い活動」で使わせたい言葉			
低学年	中学年	高学年	中学生
<p>＜作成の意図＞ 本マニュアルでは、話し合いの充実を図るために、「発達段階に応じた具体的な言語活動」を整理しました。本資料は、それをもとに児童・生徒が実際に使用する言葉を例示したものです。 指導者が話し合いの中で使用する言葉を系統的に理解し、「子どもがみるみる話すようになる指導段階表」の指導と併せて用いることで、より児童・生徒の主体的な話し合い活動を生み出すことができます。</p>	<p>＜活用の仕方＞ ○ 現在使用しているマニュアル等の見直しに役立ててください。 ○ 短冊等での学級掲示も効果的です。 ○ 当該学年を基本にしながら、実態に応じて前の段階に戻ったり、次の段階に挑戦したりすることも可能です。 ○ 分かる児童・生徒だけの話し合い活動ではなく、分からない児童・生徒も生きた話し合い活動を目指しましょう。(それぞれの立場の意見を認め合える学級の雰囲気作り)</p>		
<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見以外の意見を引き出すことができる児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>
<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>
<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>
<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>
<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>	<p>＜話し合いの場＞ 自分の意見がもてず、話し合いに主体的に参加できない児童・生徒</p>

低学年・中学年・高学年・中学生の4段階で整理することで、発達段階に応じて、前段階や次の段階を見通して指導できるようにした。

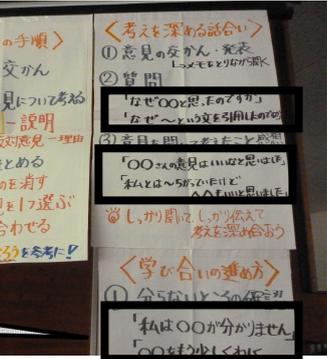
話し合う際に必要とされる場面と、表出するであろう児童生徒の立場を分けて整理した。

【資料1 発達段階に応じた「話し合い活動」で使わせたい言葉】

話し合い指導の初めの段階では、資料1の言葉の中から、基本的な話型を選んでマニュアルを作成し、児童に持たせるという方法も有効である。



学級の実態に応じて、話し合い活動で特に使わせたい言葉を選んで、教室に掲示する方法もある。全体に示すことで、授業中児童生徒と一緒に確認することができ有効である。





### (3) 授業の実際

児童生徒が創り上げる授業とはどのようなものか。小学校第5学年の説明的文章を教材とした単元「森林について興味をもったことを調べよう（森林のおくりもの）：東京書籍5年下」を実践例として具体的に説明する。

#### ア 導入の様子

導入では、学習問題をとらえさせた。学習問題は、解決の見通しが立ち、明確な答えが準備できるような課題とするため、以下のように設定した。このことにより、主体的に学習に取り組ませることができた。

学習問題：結論を一文で要約するとどのような文になるか。

#### イ 展開の様子

展開では、「結論部分の音読」「要約文を個々に書くこと」「よりよい要約文を話し合うこと」の3つの活動を行わせた。

結論部分の音読は、教師と一文交互読みで2回行い、結論の内容の大体をとらえさせた。

要約文は全員書かせること（必ず自分の意見をもつこと）で主体的に話し合いに参加できるようにした。また、早く終わった児童から板書させることで、自分の考えをもつことが難しい児童の参考にさせ、支援とした。

よりよい要約文を話し合う場面では、次のようなことに気をつけたため、的を絞った話し合いができた。

- それぞれがどのような意見をもっているかを全員で確認すること
- 自分の答えも含め、正否の判断を行い、意見を絞り込むこと
- 絞り込んだ意見の中から、自分の正しいと思う答えを選ばせ、理由や反論を書かせること
- 人数分布を確認し、誰がどの意見に賛成しているかを全員で確かめさせること

話し合い方の指導については、「子どもがみるみる話すようになるための指導段階表」を参考に行ってきた。そのことで、児童だけで問題を解決することができた。



子どもがみるみる話すようになるための指導段階表から

- 答えの根拠が書けたら相手の反論を準備させる。
- 学習した言葉を使って言わせる。
- 学習のまとめを書かせる。

#### ウ 終末の様子

終末では、学習問題に対する答えを確認し、本時の学習内容をまとめさせた。

学習問題に対する答えを確認する場面では、本時は子どもたちから模範解答に近い意見が出たので、以下のように言葉や文を補足して答えを確定した。

本時の学習内容をまとめる場面では、話し合いで出てきた子どもたちの言葉を基に、次時以降の学習に活用できるポイントとしてまとめた。

模範解答：わたしたちは、緑豊かな国土に生まれたことの幸せに感謝し、森林を育てる仕事のすばらしさ、とうとさを考えなければならない。

まとめ：結論の要約は筆者の主張に着目するとよい。

#### エ 授業の成果

話し合いの手順を指導し、話し合いが成立するような発問をすれば、児童生徒が創り上げる授業は可能である。さらに、児童生徒が創り上げる授業では、お互いが譲り合い、学び合い、認め合うため、生徒指導面でも多くの効果が期待できる。

## 2 授業ビデオの作成

本研究所で考える児童生徒が創り上げる授業スタイルの姿を、実際の授業の中から映像を使って紹介したり、検証したりして、授業のイメージを共有するようにした。

そして、ビデオ資料として整理し、本市教職員の授業改善に役立てたいと考えた。

### (1) 授業ビデオを閲覧しての授業研究



研究会の時間内に、毎週研究所員が各自で行った授業ビデオを持ち寄り、全員で視聴しながら授業の在り方についての意見交換を行う時間を設けた。

意見交換の中では、研究内容を具現化するための指導の在り方について、改善が必要な点、共有したい点など、毎回忌憚のない意見が交換された。

5月から継続して授業研究を行った結果、研究していることが確実に授業実践に結びつき、所員の授業の質が向上していった。また、それに伴って、それぞれの学級の児童が積極的に発言したり、意見交換をしたりする姿も見られるようになった。

### (2) 授業DVDの作成と配布



右の写真は研究所が作成した配布用授業DVDの一場面である。

授業をどのように展開していけば良いかが分かり易く編集しており、それぞれの段階における教師の指導の在り方はもちろん、児童がどのような状態であることが望ましいかなど、児童生徒が創り上げる授業の具体的なイメージをつかむことができるものとなっている。

また、5月から所員の授業ビデオを取りためていたため、児童生徒が創り上げる授業を行うことで児童生徒がどのように変容していくのかも紹介することができるビデオとなった。

これを市内の全ての小中学校に配布し、閲覧をお願いすることで研究を広げたいと考えている。

## Ⅸ 研究の成果と課題

### 1 成果と課題

#### (1) 成果

- 児童生徒が創り上げる授業を追究することで、児童生徒に学び方を身に付けさせ、自ら課題を解決する授業をどのように構築すれば良いかが明確になった。

- 話し合いを機能させる上で、様々な立場にある児童生徒が使用すると良い言葉を整理することで、個に応じた適切な指導や助言、賞賛を行うモデルを作ることができた。
- 子どもたちに、話し方や聞き方、態度などを段階的に指導し身に付けさせることで、主体的に表現し合い、高め合う話し合い活動を展開することができることが明らかになった。
- 授業のビデオや研究授業を通して、児童生徒が創り上げる授業のゴールイメージを共有しながら授業実践を行ったことで、それぞれが共通の成果を感じながら研究を進めることができた。

## (2) 課題

- 児童生徒が創り上げる授業を成立させるためには、単元計画や発問構成を十分に練る必要があり、今後も研究を進める必要がある。
- 研究内容の本市教職員への普及の在り方を考えていく必要がある。

## 〈参考文献〉

- ・ 小学校学習指導要領解説 国語編 文部科学省
- ・ 平成24年度 日南市教育研究所 研究紀要

## 〈研究同人〉

### 事務局

- 所 長 黒木康英 (日南市教育委員会 教育長)
- 副所長 津曲文男 (日南市教育委員会 教育専門対策監)
- 事務局 平川滋也 (日南市教育委員会 指導主事)
- 柚木山尚未 (日南市教育委員会 指導主事)
- 中條隆裕 (日南市教育委員会 指導主事)

### 研究員

- 研究部長 稲用 浩一郎 (酒谷小学校 教頭)
- 研究副部長 湊 正 (飫肥中学校 教頭)
- 主任研究員 岩切 誠 (吾田小学校 指導教諭)
- 研究員 田中 寿幸 (北郷小学校 教諭) 加藤 智美 (南郷小学校 教諭)
- 日高 太志 (吾田小学校 教諭) 中俣 英明 (飫肥小学校 教諭)
- 甲斐 裕之 (大堂津小学校 教諭) 真方 悟史 (油津小学校 教諭)
- 喜田紳一郎 (吾田東小学校 教諭) 川崎 優也 (油津中学校 教諭)